

日本の大学スポーツにおける統括組織の必要性

The necessity of unification of sport associations in Japan.

1K05B031

指導教員

主査 武藤泰明先生

宇津木 慶子

副査 友添秀則先生

【1. 序論】

全国高等学校野球選手権大会や全国高校サッカー選手権大会に代表される高校スポーツが盛り上がりを見せる一方で、その延長線上にあるはずの大学スポーツが人気を維持できていないのはなぜだろうか。大学スポーツにおいては、人気の低迷や参加者の減少など、抱える問題は少なくない。プロスポーツにも引けをとらない人気を誇るアメリカの大学スポーツにおいて、その全てを管理・運営しているのがNCAAと呼ばれる統括組織である。学生アスリートの大会・試合・練習時間の規定から始まり、リクルート、安全保障、成績管理、奨学金に至るまで、その力の及ぶ範囲は広い。

こうした統括組織の存在が大学スポーツ界全体の繁栄に関係しているのならば、日本において大学スポーツの現状に必要なものはすべてを統括する組織ではないだろうか。本論では、この統括組織の必要性を追及する。

【2. 米国における大学スポーツの現状】

NCAA はアメリカの大学スポーツ界の中心に位置する。その歴史は100年以上前にさかのぼることができ、現在では全米で1200校以上の大学から4万人を超える学生が参加している。各大学はその規模(保有する種目数、観客動員数など)や競技成績から、3つのディビジョンに分類される。

NCAA では、ただ単に学生アスリートの競技力向上を目指すのではなく、成績管理や奨学金制度の制定などアカデミックな分野にまで言及し、最重要課題を教育的な経験としている。

【3. 日本の大学スポーツにおける比較対象について】

日本の大学スポーツにおける統括組織の必要性を検討する上で、次の3つの既存の組織を比較対象としたい。まず、全国規模の統括組織として「全国高等学校体育連盟」を、次に大学規模の統括組織として「早稲田大学競技スポーツセンター」を、最後に競技レベルでの統括組織として「全日本大学野球連盟(JUBF)」を挙げる。それぞれ、一般的な認知度、開示されている情報量の多さなどに基づいて、NCAA との比較対象になりうると判断した。

【4. 比較1】

現在、全国高等学校体育連盟には、男女合わせて100万人を超える登録者がおり、統括する種目は33専門部にのぼる。設立から60年を迎えた今、日本における学校スポーツの統括組織としては最大規模の全国組織と言ってもいいだろう。その目的は、体育・スポーツの振興を図ることで、高校生の健全な発達を促すこととしている。また、発表されている収支計算書からは、スポンサー企業の存在も確認でき、全国組織としてのメリットを十分に生かしつつ、組織運営がなされていると考えられる。

【5. 比較2】

早稲田大学において、スポーツは大学創設当初から非常に重要なものとして位置づけられてきた。現在は43部が存在し、2000人を超える学生アスリートが在籍している。2008年5月に発表された

「早稲田アスリート宣言」など、学生の行動規範は示しているものの、そこにアカデミック分野への具体的な言及はなされていない。また、学生アスリートに関する成績や卒業率に関するデータなどは、競技スポーツセンターでは扱っておらず、ここに NCAA との違いが読み取れる。

【6. 比較3】

全日本大学野球連盟には、現在都道府県や地域別に 26 の学生野球連盟が存在する。その歴史は古く、1947 年の全日本大学野球連盟の設立にまでさかのぼることができる。「野球」という競技単独の組織として見れば、その活動が活発であることは収支計画書などからも明らかである。

ただし、組織自体にスポンサー企業がついて

いる形跡はなく、事業収入も新聞社との共催で行われている大会に頼りきりであることがうかがえる。

【7. まとめ】

日本における規模の違う 3 つの統括組織を見てきたが、NCAA との大きな違いは、やはりその「目的」にある。3 つの組織の中でアカデミックな部分への言及をしている組織はない。大学スポーツの価値向上のためには、なぜ「大学」という教育機関でスポーツをするのかその原点に還る必要がある。そして、成績管理や奨学金制度・特待生制度などの全国共通の取り決めが必要であり、大学スポーツの繁栄には全国統括組織の必要性は十分にあると考えられる。